

越境するイエス

(ヨハネ四・一～二九)

「我々の国境線は実に貧弱だ。私が大統領になつたら、強大な壁を作ろう。万里の長城のようなね。そして費用は誰が払うんだっけ、」すると間髪を入れずにオーディエンスが叫ぶ。「メキシコ!」。もう何度見せられたことだろう。アメリカをもう一度偉大な国にするためには手段を選ばない、既成の政治家にはない強烈な個性に群衆は熱狂している。不動産王ドナルド・トランプ氏はもはや泡沫候補ではないことは確かだ。時にこの発言に苦言を呈したのは教皇フランシスコ。メキシコ訪問を終える際に彼はこう言った。「橋を築くことでなく、壁を造ろうとそれだけを考えている人は、それがどこであろうと、キリスト教徒ではありません。大胆な発言である。しかし壁を造って閉鎖的であることがどうして「キリスト教徒ではない(≠クリスチャンらしくない)」とまでなるのだろうか。今朝の箇所におけるイエス・キリストの姿を見るならばそのなぞは解けてくるだろう。以下イエスの「越境」について考えてみたい。

一、「地理的障壁」を乗り越える

ユダヤでの初期伝道を終えられたイエスは自らのホームタウンであるガリラヤに向かわれたのだが、その際に気になる記述がある。それが四節の「しかしサマリヤを通つていかなければならなかった。」である。九節にある通り、当時のユダヤ人とサマリヤ人は反目しあう関係であった。興味深いのは反目しあうことは洋の東西を問わず一種の近親憎悪であり、ユダヤ人とサマリヤ人の関係もまさにそれであった。サマリヤ人は北王国の滅亡の後、周辺諸民族との結婚によつて形成されたと言われ、南ユダ王国の末裔であるユダヤ人たちは彼らを異邦人として見下していたが、サマリヤ人たちは自身は自らをユダヤ人が思うように神の選民だと考えていた。こうした正当性の主張から多くの流血が生まれ、敵意は増大した。そのような中でイエスはサマリヤを通つた。否、通らねばならなかった。この「ねばならない」には神による迫りがあると考えられる。つまりイエスは神の迫りを受け越境させられたのだ。

二、「罪」を乗り越える

近親憎悪の満ちるスカルの町。白昼堂々ヤコブの井戸の傍らにたたずむイエスの前に現れたのは一人のサマリヤの女であつた。この女にイエスは語り掛けるのだ。これだけでも相当の越境であつた。それは九節の「あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリヤの女の私に、」に明らかである。しかしイエスの越境はそうした地理的・民族的なものに留まらなかつた。一六節以下を読むとイエスがこの女の素性をよく知つていたことが明らかになる。この女、五回にわたる結婚の破局を経て六人目と同棲中なのだ。灼熱の正午過ぎに水を汲みに来たこともこれで合点がいく。多くの婦人たちのように早朝に出かければ、途端にゴシツプまみれになるのが関の山。だから彼女は一人で水を汲みに来たのだ。そんなサマリヤの女に神の子イエスは声をかける。そこには罪人の世界に降りて来られる「越境」の姿勢が確かにあるのだ。

三、「見えるもの」を乗り越える

見ず知らずの敵性外国人(?!)に自らの素性を看破された彼女はイエスに対して「礼拝する場所はどこにあるのか」という神学的な疑問を投げかける。それに対するイエスの答えもまた女の想定をはるかに超えるものであつた。まことの礼拝とはエルサレム神殿やサマリヤのゲリジム山といった「場所」に制約されるものではない。誰であつても真の悔い改めとともに神に立ち返つたものであれば、その人々が集

まるところはどこでも真の礼拝の場所になるのだとイエスは言われたのである。これもまた越境である。人間はとかく目に見えるものがすべてだと思ひ、そこに収斂点を見出した生き物だが、イエスはそれを超えた霊的な真実、霊的な礼拝へと人間を導いておられるのだ。

* * *

イエスの「越境」は彼女にインパクトを与えた。水がめを置いて町に戻つた彼女は自らに起こつたことを人々に証した。「私のしたこと全部を私に言った人がいるのです。」といつてイエスがキリストであることが部分的にはあれ証をしたのである。イエス・キリストという「生ける水」を体験した彼女に水がめはもういらぬ。同じくいのちの水を飲み、そのいのちに生かされる者は恥を超え、イエスの越境する心をもつて自分の殻を破り、越境して福音を伝えることが可能になる。たとえ未成熟であつたり、全部を言い当てたとは言えないとしても、だ。こう考えると冒頭の教皇の言葉にも納得だ。キリスト教が「イエスにつき従ふこと」であれば、教会の周りに壁をつくつて安住することは確かにキリスト者の道ではない。さあ私たちも助け主なる聖霊に満たされ、イエスの「越境」を体現しよう。 Come and see!